はじめに

京都産業大学　タンパク質動態研究所長
永田　和宏

タンパク質動態研究所が発足して３年、ここに年報として、この一年の成果を報告できるのはうれしいことである。個々の研究員の皆さんの大きな努力により、この一年も世界に誇りうる成果を生み出し、国内的にも、国際的にも本研究所が広く認知されるところとなっている。

研究のための外部資金という面から見ても、引き続き「私立大学研究ブランディング事業」が継続していることのほかに、研究所の複数のメンバーによる武田医学研究財団からのグラントをはじめとして、個人研究費のほかにも研究所としての研究資金を得ていることも特筆しておきたい点である。私学における基礎研究推進のための基盤として、このような外部資金の導入は今後とも積極的に取り組まなければならない課題であろう。

本年の事業として特に強調しておかなければならないものは、本研究所と、新学術領域研究「新生鎖の生物学」（日本学術振興会）の共催による国際会議「Proteins from the Cradle to the Grave」が開催されたことであろう。比叡山延暦寺を会場として､2018 年 8 月 26 日～29 日の４日間にわたって開かれた。海外からの招聘演者 14 名を含め、参加者 177 名という大きな、かつ活発なシンポジウムになったのはうれしいことだった。Nature および Nature Structural and Molecular Biology (NSMB)の国際学術誌の編集者２名も海外から参加し、特に NSMB 誌においては、大きな写真（本年報　ページに再録）とともに、“Life of proteins: from nascent chain to degradation”と題して詳細な報告がなされ、この会議の国際的なインパクトを示すものとなった（Vol. 25, 996-999, 2018）。

数名の国内外の研究者による報告であったが、気の利いた章題からなっていいるので、順に拾ってみると“Exciting science, traditional Japanese vegetarian food and vibrant discussions on tatami mats”“Protein synthesis at high resolution”“Origami: how proteins are folded”“Translocation of newly synthesized proteins across membrane”“Poka-yoke: surveillance of protein biogenesis”“Hara-kiri: proteasomal degradation and autophagy”“Prospects for the protein community”となっている。世界遺産延暦寺の特殊な環境での国際会議で、多くの外国人が日本という国に対して持っている興味と、サイエンスをいかに楽しもうとしているかが如実にわかるような遊び心満点の章題である。

この会議には、本研究所からも多くの若い研究者、大学院生が参加して、積極的に個人的な discussion に参加していたのも印象的なことであった。ここから世界を常に意識した若い研究者が多く育って行ってくれることを願うばかりである。